

中国人留学生と日本人大学生の断りのEメールの比較

濱田 美和・古本 裕子*・桑原 陽子**・深澤のぞみ***

A Comparison of Refusal Emails in Japanese between Chinese Students and Japanese Students

Miwa HAMADA, Yuko FURUMOTO,
Yoko KUWABARA, Nozomi FUKASAWA

E-mail: hamada@ctg.u-toyama.ac.jp, fururu3m@coast.ocn.ne.jp,
kuwayo@gmail.com, nozomif@staff.kanazawa-u.ac.jp

Abstract

This paper compares the characteristics of emails refusing a professor's request written by 76 Chinese international students and 65 Japanese students. In this analysis, the categories proposed by Yoshida, Nohara, Mori and Usami (2010) in "Communicative functions and functional elements in refusals" with several modifications.

The results show that Chinese have a higher usage rate for [address term], [opening remarks] and [signature] and tend to write emails more formally structured than Japanese. In regards to the functional elements related to <consideration for others>, Chinese have a higher usage rate for [gratitude], [positive comments] and [empathy], whereas Japanese have a higher usage rate for [acknowledgment of responsibility]. A difference is found in how Japanese and Chinese students express <consideration for others>. In regards to [indicate his/her intention], Chinese have a somewhat lower usage rate at 92.1% than Japanese at 100% and may perceive that it is more polite not to use it. Furthermore, the multiple usage rate of [opening remarks], [excuse], [apology], [empathy] and [suggest alternative] by Chinese is higher than by Japanese. Writing the same thing repeatedly or elaborating politely do not always give the reader a good impression, so these points must be addressed in Japanese language education.

キーワード：日本語，Eメール，断り，中国人留学生，日本人大学生

keywords：Japanese Language, Email, Refusal, International Student from China, Japanese Student

I はじめに

IT技術の急速な発展に伴い、Eメールは、ビジネスにおいても日常生活においても重要なコミュニケーションツールの1つとなっている。大学生活においても学習や研究活動、就職活動など様々な場面でメールの利用が求められる。しかし、一定の日本語力を有していても場面に応じて適切なメールを書く力が不十分な留学生は多い。日本人大学生の中にも改まったメールを書く力を十分に有していない学生がいる。

Eメールは、1990年代後半からのインターネットの普及によって広く一般に浸透し、活発に利用さ

れるようになったが、歴史が浅いため、書き方のマナーはまだ固定化していない。近年、ビジネスメールについては、文例集やマナーを説明した書籍が多く出版され、書き方の指針になる資料も充実してきている。しかし、ビジネスメールの書き方を、そのまま一般的な改まったメールの書き方の手本とすることはできない。形式的過ぎて逆に読み手に不快感を与えるメールとなってしまう恐れもあるからである。留学生に対してメールの書き方を指導する際の手本とできる教材は、日本人大学生を対象としたものを含めても非常に数が少なく、それらも、情報教育や作文教育の一部としてメールが取り上げられているに過ぎない。そこで、筆者らは、日本人大学生も視野に入れた留学生向けメール教材の開発を目指し、そのための研究を行っている。

本研究では、読み手への配慮がかなり必要となる

* 名古屋学院大学

** 福井大学

*** 金沢大学

断りのメールについて、中国人留学生¹⁾と日本人大学生が書いた日本語のメールをもとに検討を行い、両者の書く断りのメールの特徴を明らかにしたい。

Ⅱ 先行研究

断りは、人間関係に摩擦を生む恐れのある言語行動である。断り後も関係を維持したい相手に対して、断りの意向を伝えるのは、母語でも難しく、非母語を用いて行う場合は、さらなる困難を伴う。そのため、日本語教育においても、断りを扱った研究はこれまでも様々なされている。

これらの先行研究では、Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990) の枠組みを適用して、日本語学習者や日本語母語話者に対して行った談話完成テストによって得られた断りの発話を、謝罪、言い訳、代案などの意味公式²⁾に分類し、中間言語語用論の観点から分析したものが多く見られる。

この中で、中国人日本語学習者を対象とした研究も行われている。中国人日本語学習者は断るとき、代案を積極的に提示すること(藤森, 1994)、弁明を多用すること(藤森, 1995)などが、日本語母語話者、中国語母語話者との比較を通じて報告されている。以上の研究は、いずれも対話場面を想定して調査が行われているが、メールでの断りにおいても同様の傾向が現れる可能性があり、注目すべき結果だと思われる。

意味公式を用いた分析は、メールの研究でも取り入れられている。築・大木・小松(2005)は、メールにおける男女差を見る目的で、日本語母語話者の書いた断りのメールについて、理由、謝罪、断り、代案、関係維持の5つの意味公式を取り上げ、分析を行っている。

また、吉田(2009)は、日本語学習者の書きことばによる言語行動の特徴を明らかにする目的で、熊谷・篠崎(2006)によるコミュニケーション機能と機能的要素の概念³⁾を用いて、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の書いた断りのメールを比較している。言い訳、謝罪、代案提示などに加えて、宛名、冒頭の挨拶、名のり、署名といったメールのきりだし、結びも含めた形で分析している。

このように、日本社会におけるEメールの普及とともに、日本語学習者の書くメールをデータとした研究も行われるようになってきた。しかし、その数

はまだ少なく、中国人日本語学習者の書く断りのメールについて、その全体構造から見た特徴を観察した研究は、管見の限り、見当たらない。

Ⅲ 本研究の目的

本研究の最終目標は、日本人大学生も視野に入れた留学生向けメール教材の開発である。会話においては、改まった表現を用いて適切に意図を伝えるだけの日本語力があっても、メールではうまく伝えられないという留学生はよくいる。メールは便利なツールであるが、伝達するのはデジタル化された文字情報だけであり、表情、しぐさ、声の調子などの情報が排除されるため、相手に気持ちが伝わりにくい。加えて、会話でのやりとりのように、相手の反応を見ながら、伝達内容を調整していくこともできない。このように、メールでのコミュニケーションには、会話で相手に伝えるのとは異なるスキルが要求されるため、特に日本に来て間もなく、日本語のメールでやりとりした経験が少ない留学生に、メールを書くのを不得手とする学生が多い。日本人大学生についても、特に低学年の場合は、改まったメールを書く力を十分に有していない学生がいる。大学入学前に改まったメールを書く機会は少なく、大学生になって活動範囲が広がり、様々な人々と接する中で、書き方を身につけていくというケースが多いためではないかと思われる。

そこで、本研究では、日本語で改まったメールを書くのにあまり慣れていない、中国人留学生と日本人大学生を対象として、それぞれの書く断りのメールを分析する。両者の間にどのような相違があるのかを観察し、日本語でのメールの書き方を指導する際に留意すべき点、教材開発の際に工夫すべき点を検討していくための手がかりを得たい。

Ⅳ 収集データの概要

1. データの収集方法

中国人留学生については、2008年10月～11月、2009年4月～5月、10月～11月に中部・北陸地方の国立4大学と私立1大学で調査を行った。対象は、学部1年生⁴⁾、および、日本に留学して間もない学生のうち、中級レベル以上の日本語力を有する学生とした。

日本人大学生については、2010年6月に、中国人留学生の調査を行った国立大学のうちの1校で調査を行った。対象は、大学に入って間もない学部1年生とした。

調査方法は、調査者が課題の用紙を配布して調査内容の説明を行った後、調査へ協力する学生は調査期間内に、調査者を課題に挙げた教員「本田先生」と想定したメールを書いて、調査者宛に個別に送信するという手順で行った。

2. 課題の内容

課題の内容は、所属学科の教員から頼まれていた学会の手伝いのアルバイトを断るメールとした。具体的な課題の提示方法は以下の通りである。

本田先生*宛に、次のメールを書いて、xxx@xxx.xxxに送ってください。（*本田先生は、あなたの指導教員ではありません。あなたと同じ学科の先生で、あなたの名前と顔は覚えてくれています。）メールの件名（Subject）も、内容に合ったものを、自分で考えてつけてください。

<先生に頼まれていたアルバイトを断るメール>

- ・アルバイトの内容：学会の手伝い、学会の開催は1週間後
- ・断る理由：国の友人が来日するため(中国人留学生)、ホームステイ先の家族が来日するため(日本人大学生)

メールの宛先は、頻繁にやりとりをする関係にはないが、今後も相手との関係維持への配慮が必要となる相手として、指導教官ではない同じ学科の顔見知り程度の間柄の教員宛とした。

メールの内容は、一旦自分が引き受けていたアルバイトを断るものとし、アルバイト実施日までに残された日にちを1週間とした。より注意深く断らなければならない状況を設定するためである。

断る理由は、中国人学生には「国の友人が来日するため」、日本人学生には「ホームステイ先の家族が来日するため」と、両者にはほぼ等価の内容をこちらから提示した。メールに書く内容のばらつきを抑え、全体的な傾向を見るためである。

3. 収集データ

中国人留学生76人(女性46人、男性30人)、日本人大学生65人(女性59人、男性6人)のデータが得られた。中国人留学生の学部別の内訳は、人文・社

会系が44人、理工系が21人、その他(留学生別科等)が11人、在籍身分別の内訳は、短期留学生が24人、学部1年生が20人、大学院修士課程1年生が9人、研究生が7人、学部2年生が3人、大学院修士課程2年生と博士課程1年生と博士課程2年生が各1人である。日本人大学生は全員が人文系の学部の1年生である。

4. 分析の枠組み

本研究の分析では、宇佐美・森・吉田(2008)をはじめとした「生活場面で必要となる日本語書きことば」データの収集・分析に関わる一連の研究で用いられている「コミュニケーション機能・機能的要素一覧」を参考にした。宇佐美らの研究は、日本語母語話者と学習者の言語行動に関する研究のための学習者コーパスの構築を目的としたもので、メールデータをもとにして、緻密な枠組みが示されている。

今回は、吉田・野原・森・宇佐美(2010)の「断り場面のコミュニケーション機能・機能的要素」の枠組みを一部修正し、援用した。

5. 分析の手順

分析の手順も吉田ら(2010)にならい、メール本文の文章を、①ひとつの「機能的要素」が続いていると考えられる部分はひとつのチャックとする。②ただし、文の区切りを表す記号があればそこでチャックを切るという方法で、文章を機能的要素にチャック分けした。機能的要素の分類は3人で行い、2者間の評定の一致率を表す κ 係数⁵⁾は0.96~0.98の間に位置していた。3人の間での判定が異なる場合⁶⁾は話し合いをして特定の機能的要素に決定した。

本稿での調査データに対して立てた25の機能的要素およびその具体例を表1に示す。[無理・責任承認]と[日付]の2つは、吉田ら(2010)にない機能的要素である。このうち[無理・責任承認]は、吉田ら(2010)による一連の研究の1つである宇佐美・森・吉田(2008)において、依頼場面の機能的要素として立てられていたものを用いた。[無理・責任承認]は、無理・迷惑であること、または自分自身に責任があることを認識していることの表明で、「急にお断りして」、「勝手ながら」、「私事でご迷惑をおかけして」などの表現がこれに当たる。[日付]は差出日の表示で、メールでは自動的に送信日時が表示されるが、これとは別に差出人自らが本文の終

表1 依頼に対する断り コミュニケーション機能・機能的要素一覧

| コミュニケーション機能 | 機能的要素 | 説明 | 使用される言語表現・内容（例） |
|-------------|---------------------|--|---|
| きりだし | 宛名 | 文章冒頭で現われる宛名，受取人名 | 本田先生 先生 本田先生へ |
| | 冒頭の挨拶 | 文章冒頭で現われる定型的挨拶表現 | こんにちは 拝啓 いつもお世話になって います この間どうもありがとうございました 突然のメール申し訳ありません |
| | 自己紹介 | 書き手自身の「属性」（氏名・身分） について説明 | 〇〇です △△学類×年の〇〇です 私は△ △学部□□学科の〇〇と申します |
| | 話題提示 | 話題・用件について予告，提示 | 先日引き受けた学会のアルバイトの件なのですが 学会のお手伝いのアルバイトのことで <u>本田先 生に頼まれていた学会の手伝いアルバイトを アルバイトの紹介をいただきまして</u> |
| 状況説明 | 現在の行為 | 自分が現在行っている行為（これか ら行おうとする行為）を記述 | メールさせて頂きました ご相談したいことが ございます 至急お伝えしたいことがあり，こ のような形でご連絡させていただきました |
| | 言い訳 | 断りの理由となる自分の状況や心情 について，読み手に説明 | 留学先のホストファミリーが来日するため 留 学先でお世話になったホストファミリーから，学 会の日に来日するという連絡があった為です ちょうどそのとき，中国の友人が日本へ来る予定 ができました |
| | 意向表明 | 断る意向の表明 | 今回は断らせていただきます キャンセルさせ てください 学会のお手伝いをするのが出来 なくなりました <u>ですから，先生から 推薦していただいたアルバイトはちょっと</u> |
| 確認 | 状況確認 | 交渉の周辺状況について，読み手に 確認 | 一週間後行われることになっていますね |
| 理解の促し | 直接依頼 | 読み手に自分の立場への理解を求め るための直接的なお願い | よろしくお願いします どうか許してください どうか，事情ご賢察の上，お許しいただきた くお願いいたします |
| | 間接依頼 | 読み手に自分の立場への理解を求め るための間接的なお願い | ご理解くだされば幸いです 誰か他の人に頼ん でくださると幸いです |
| | 伺い | 読み手からの理解や善処を期待する 疑問文 | どうかご理解いただけませんか |
| 対人配慮 | <u>無理・ 責任承認</u> | 無理・迷惑であること，または自分 自身に責任があることを認識してい ることの表明 | 急な変更をして 急にお断りして，ご迷惑をか けてしまい もう一週間後にセまっているとい うのに 誠に勝手ながら 私事でご迷惑をお かけして |
| | 謝罪 | 実質的な謝罪表現 | 大変申し訳ありません 本当にすみませんでし た 心より，お詫びを申し上げます お引き 受けできなくてすみません |
| | 前置き | 定型的な前置き表現 | 申し訳ありませんが すみませんが 大変恐 れ入りますが 恐縮ですが 大変失礼とは存 じますが |
| | 謝礼 | 感謝の表明 | 本当にありがとうございます 感謝します 先生は私のことをよく覚えていただいて，誠にあ りありがとうございます |
| | 好意的反応 | 依頼された件への好意的な反応、ま たは相手が依頼してくれた事実につ いての好意的な反応を表明 | 学会の開催は楽しみにしております 1 週間後 の学会は本当に期待しておりますが 学会の手 伝いを通して，いろいろ勉強になれます それ は本当に学習の経験を蓄積するためにいいチャン スだと思います |
| | 共感 | 相手の依頼に添いたい心情の表出 | せっかく誘っていただいたのに 残念ながら 今回はあいにく とても残念と思っております 本当は参加したいです |

| | | | |
|-------|-------|----------------------|--|
| | 気配り | 相手の成功を望む、または相手を励ます表現 | 先生の学会での成功をお祈りしています　それでは、学会頑張ってください |
| | 関係維持 | 今後も相手との関係を維持したい心情の表出 | また別の機会があればぜひお手伝いさせて下さい 今度とも、どうぞよろしくおねがいします 今後このようなことが無きよう努めます |
| | 代案提示 | 依頼された件を断る代わりに、代案を提示 | 現在代理を探しておりますので、見つかり次第先生にご連絡差し上げたいと思います　当日はお手伝いできませんが、事前準備など何かお手伝いできることがありましたらまた声をかけてください |
| 締めくくり | 最後の挨拶 | 文章末尾で現われる挨拶表現 | それでは失礼します　取り急ぎ　敬具　では、また　お忙しいところすみませんでした　それでは、ご自愛のほどお祈り申し上げます |
| | 日付 | 差出日の表示 | 平成21年 4月29日　2009年11月 3日 |
| | 署名 | 差出人名の表示 | 〇〇　〇〇より　▽▽大学△△学部　〇〇 |
| | 返信期待 | 相手からの返信を期待する意思の表示 | ご連絡を待ちしております　お返事お待ちしております |
| その他 | その他 | 書いてある内容が不明のもの | |

~~~~~は、吉田・野原・森・宇佐美 (2010) と異なる箇所を示す。

わりに「(〇年) 〇月〇日」と書いたものを指す。さらに、本稿の調査データにあわせ、[話題提示]、および「言い訳」と「意向表明」の分類基準を一部変更した。

「話題提示」は、吉田ら (2010) では「話題・用件について予告」という説明がなされ、具体例として「コンサートのことだけど」、「コンサートの件ですが」、「22日なんだけど」、「他でもなく」が示されている。本稿では「～ですが」や「～の件で」などの典型的な話題提示の表現形式を取るもの以外に、メール本文中で「学会の手伝いのアルバイト」について初めて提示された箇所も「話題提示」に含めた。これは、中国人留学生のメールにおいては語彙・文法上の誤用の影響もあり、「話題・用件についての予告」として書こうとしたのか、判断しにくい例が複数見られたことによる。例えば、(1) は中国人留学生のメールの冒頭部分であるが、下線部「本田先生に頼まれていた学会の手伝いアルバイトを」が「学会の手伝いのアルバイト」に関する初めての記述に当たるため、これを「話題提示」として分析した。

(1) 〇〇(名前)です。

来週は国の友人が来日するために、本田先生に頼まれていた学会の手伝いアルバイトを断りたいです。

「言い訳」は、吉田ら (2010) では「『今回はちょっ

と…』などのように文末を濁しているものも「言い訳」に含める」とあるが、本稿では「意向表明」として扱うことにした。例えば、(2) は中国人留学生のメールの一部であるが、1文目～4文目を「言い訳」、5文目(下線部)を「意向表明」とした。

(2) しかし、残念なことは国の友人が来日するつもりです。彼らは中国人なので、日本語がぜんぜん話せません。私は彼らに案内させてあげなければなりません。友人は多分一週間ぐらい日本に住むつもりです。ですから、先生から推薦していただいたアルバイトはちょっと。

また、吉田ら (2010) のデータは誘いに対する断りであるのに対して、本稿のデータは依頼に対する断りであることから、表 1 に示した各機能的要素の説明も、依頼に対する断りにあわせて部分的に修正した(表 1 の下線部)。

## V 分析結果および考察

本研究では、各機能的要素の使用者の割合、使用回数、この 2 つに着目して、中国人留学生と日本人大学生の断りのメールを分析する。

### 1. 各機能的要素の使用者の割合

#### 使用者の割合の高い機能的要素

各機能的要素の使用者の割合を算出したところ、

表2のようになった。

中国人留学生、日本人大学生ともに、[話題提示]、[言い訳]、[意向表明]、[謝罪]、これら4つの機能的要素について、使用者の割合が特に高いことがわかる。[話題提示]と[言い訳]については、使用者の割合がともに100%となっている。[意向表明]についても、日本人大学生においては100%、中国人留学生においても92.1%と9割を超えている。[謝罪]については、中国人留学生の使用者の割合が78.9%、日本人大学生が75.4%となっており、[話題提示]、[言い訳]、[意向表明]と比べると、やや低い。ただし、本稿で「前置き」に分類した「申し訳ありませんが」や「すみませんが」を含めて計算した場合は、中国人留学生の使用者の割合が93.4%、日本人大学生が84.6%となり、かなり高くなる。

なお、中国人留学生については[宛名]の使用者の割合も90.8%と非常に高いが、日本人大学生については27.7%と低い。吉田(2009)では、友人からの誘いに対する断りのメールを分析した結果として、

表2 各機能的要素の使用者の人数と割合

| コミュニケーション機能 | 機能的要素    | 中国人留学生<br>76人 |        | 日本人大学生<br>65人 |        |
|-------------|----------|---------------|--------|---------------|--------|
| きりだし        | 宛名***    | 69人           | 90.8%  | 18人           | 27.7%  |
|             | 冒頭の挨拶*   | 51人           | 67.1%  | 32人           | 49.2%  |
|             | 自己紹介     | 46人           | 60.5%  | 36人           | 55.4%  |
|             | 話題提示     | 76人           | 100.0% | 65人           | 100.0% |
| 状況説明        | 現在の行為    | 7人            | 9.2%   | 13人           | 20.0%  |
|             | 言い訳      | 76人           | 100.0% | 65人           | 100.0% |
|             | 意向表明*    | 70人           | 92.1%  | 65人           | 100.0% |
| 確認          | 状況確認     | 1人            | 1.3%   | 0人            | 0.0%   |
| 理解の促し       | 直接依頼     | 23人           | 30.3%  | 16人           | 24.6%  |
|             | 間接依頼     | 0人            | 0.0%   | 2人            | 3.1%   |
|             | 伺い       | 1人            | 1.3%   | 0人            | 0.0%   |
| 対人配慮        | 無理・責任承認* | 23人           | 30.3%  | 33人           | 50.8%  |
|             | 謝罪       | 60人           | 78.9%  | 49人           | 75.4%  |
|             | 前置き      | 25人           | 32.9%  | 14人           | 21.5%  |
|             | 謝礼***    | 25人           | 32.9%  | 4人            | 6.2%   |
|             | 好意的反応*   | 7人            | 9.2%   | 0人            | 0.0%   |
|             | 共感**     | 29人           | 38.2%  | 8人            | 12.3%  |
|             | 気配り      | 1人            | 1.3%   | 2人            | 3.1%   |
|             | 関係維持     | 26人           | 34.2%  | 25人           | 38.5%  |
| 締めくくり       | 代案提示     | 8人            | 10.5%  | 4人            | 6.2%   |
|             | 最後の挨拶    | 10人           | 13.2%  | 3人            | 4.6%   |
|             | 日付       | 7人            | 9.2%   | 1人            | 1.5%   |
|             | 署名**     | 51人           | 67.1%  | 25人           | 38.5%  |
| その他         | 返信期待     | 2人            | 2.6%   | 0人            | 0.0%   |
|             | その他      | 3人            | 3.9%   | 0人            | 0.0%   |

Fisherの正確確率検定 \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \* p<.05

[宛名]の使用者の割合について、韓国人日本語学習者88.2%、日本語母語話者79.2%という値が示されている。この結果と比べると、今回のデータにおける日本人大学生の[宛名]の使用者の割合の低さが目立つ。吉田(2009)の調査対象も学生であるが、課題の内容は、同年代の友人宛のメールを書くというもので、教員宛とした本稿の調査とは異なる。友人宛のメールでは、本文初めに呼びかける感じで相手の名前を書くことも考えられ、このことが本稿の調査結果との違いに結びついた可能性もある。

### 機能的要素の使用に関する中国人留学生と日本人大学生との相違

次に、各機能的要素の使用者の割合について、中国人留学生と日本人大学生との相違を検討する。Fisherの正確確率検定を行った結果、表2に示したように、[宛名]、[冒頭の挨拶]、[意向表明]、[無理・責任承認]、[謝礼]、[好意的反応]、[共感]、[署名]の8つの機能的要素において、中国人留学生と日本人大学生の間に有意な差が確認された。以下、これら8つがかかわる〈きりだし〉、〈状況説明〉、〈対人配慮〉、〈締めくくり〉、この4つのコミュニケーション機能を取り上げ、順に相違を見ていく。

〈きりだし〉の機能的要素は[宛名]、[冒頭の挨拶]、[自己紹介]、[話題提示]の4つである。このうち、[自己紹介]と[話題提示]については、中国人留学生と日本人大学生の間で使用者の割合に有意な差はなく、[自己紹介]はいずれも6割前後、[話題提示]は全員が使用していた。使用者の割合に差が見られたのが[宛名]と[冒頭の挨拶]である。[宛名]は中国人留学生が90.8%、日本人大学生が27.7%、[冒頭の挨拶]は中国人留学生が67.1%、日本人大学生が49.2%で、いずれも中国人留学生のほうが使用者の割合が高かった。[宛名]と[冒頭の挨拶]は断りのメールに限らず、広くメールを書く際に現れる要素で、これらの使用によって、より正式で整った印象を読み手に与えるメールとなる。中国人留学生のほうが形式面に気を配ってメールを作成していることがうかがわれる。

〈状況説明〉の機能的要素は[現在の行為]、[言い訳]、[意向表明]の3つである。このうち、[現在の行為]と[言い訳]については、中国人留学生と日本人大学生の間で使用者の割合に有意な差はなく、[現在の行為]は1～2割、[言い訳]は全員が

使用していた。使用者の割合に差が見られたのが「意向表明」である。「意向表明」の使用者の割合は、中国人留学生が92.1%、日本人大学生が100%で、中国人留学生のほうが使用者の割合が低かった。日本人大学生は65人全員が使用しているのに対し、中国人留学生は76人中6人が、(3)(4)のように「意向表明」を用いずに「言い訳」だけで、アルバイトを断ることを読み手に伝えようとしていた。

(3) 本田先生 いつもお世話になります。〇〇(名前)です。  
学会の手伝いについて、学会の開催は1週間後ですが、  
ちょうどその日には、国の友人が来日します。本当に申  
し訳ございません。それでは、よろしく願いいたします。  
〇〇(名前) <xxx@xxx.xxx.ac.jp>

(4) 本田先生、こんにちは。アルバイトのことについて、  
学会が近づいて、後一週間のことを知って、いろいろ手伝  
いしてあげたいけど、その時、ちょうど国の友人が来日す  
るため、もしかしたら、時間がないので、ご了解いただき  
たいと思います。

〇〇(名前)(△△(所属名))

このように「意向表明」を使用せずに「言い訳」  
だけで暗示的に断りを述べる方法は、会話ではよく  
行われるが、それは会話においては、話し手が「言  
い訳」を述べた時点で、聞き手が「アルバイト、で  
きなくなったってこと？」のように応じることでよ  
うて、相手に断りかどうかを確認できるためである。  
メールでも、「意向表明」がないことによって読み  
手が断りの意向を十分に把握できなかった場合、断  
りかどうかを書き手に確認することは可能であるが、  
それには時間も労力もかかり、読み手に負担を与え  
てしまう。そのため、このような方法をとることは、  
改まったメール文においては丁寧というよりも、言  
葉足らずな印象を読み手に与えてしまいかねない。  
しかし、「意向表明」を行わなかった中国人留学生  
はより丁寧さを増すために、あえて曖昧に表現しよ  
うとした可能性が高いと思われる。

〈対人配慮〉の機能的要素は「無理・責任承認」、  
「謝罪」、「前置き」、「謝礼」、「好意的反応」、「共感」、  
「気配り」、「関係維持」、「代案提示」の9つである。  
このうち、「謝罪」、「前置き」、「気配り」、「関係維  
持」、「代案提示」については、中国人留学生と日本  
人大学生の間で使用者の割合に有意な差はなかった。  
「謝罪」は8割近くと使用者の割合がかなり高く、

「関係維持」が3~4割、「前置き」が2~3割、  
「代案提示」が1割前後と続き、「気配り」はごく  
一部の学生の使用のみであった。藤森(1994)では、  
上司や教授からの誘いを断る発話場面において、断  
り行為の修復として、日本人母語話者が「関係維持」  
を使う度合いが高いのに対して、中国人日本語学習  
者は「代案」の提示が多いことが報告されているが、  
本研究のデータにおいてはこのような差は見られな  
かった。使用者の割合に差が見られたのが「無理・  
責任承認」、「謝礼」、「好意的反応」、「共感」の4  
つである。以下、この4つを順に見ていく。

1つ目の「無理・責任承認」の使用者の割合は、  
中国人留学生が30.3%、日本人大学生が50.8%で、  
中国人留学生のほうが低かった。中国人留学生の多  
くは「迷惑をかけて」、「お手数をおかけして」とい  
った相手に迷惑をかけることに言及する表現を使用し  
ており、これだけを比べると、中国人留学生が25.0  
%、日本人大学生が12.3%となり、中国人留学生の  
使用者の割合のほうが高くなる。しかし、日本人大  
学生の場合はこれに加えて、「急な話で」、「学会は  
1週間後に迫っているというのに」のように直前の  
断りであることに言及したり、「私事で」、「まこと  
に勝手ながら」のように自分の都合で断ることに言  
及する表現の使用が多く見られた。それぞれの使用  
者の割合は、日本人大学生は35.8%、13.2%である  
が、中国人留学生は3.9%、0%ときわめて低い。  
つまり、直前の断りであることや、自分の都合で断  
ることへの言及をするかどうか、中国人留学生と  
日本人大学生の「無理・責任承認」の使用者の割合  
の差の主な要因と言える。

2つ目の「謝礼」の使用者の割合は、中国人留  
学生が32.9%、日本人大学生が6.2%で、中国人留  
学生のほうがかなり高かった。中国人留学生、日本  
人大学生ともに、「アルバイトを紹介していただきま  
して、ありがとうございます」のように、アルバイ  
トの紹介や依頼に対する謝礼を述べたものが大半を  
占めていた。

3つ目の「好意的反応」の使用者の割合は、中国  
人留学生が9.2%、日本人大学生が0%で、中国人  
留学生についても「好意的反応」の使用は決して多  
いとは言えないが、日本人大学生に1人も使用者  
がいないことから考えると、中国人留学生の断りの  
メールの特徴を表す機能的要素の1つと言えるだ  
ろう。中国人留学生が好意的反応を示した対象は

「学会の手伝い」と「学会の開催」で、前者に対しては「勉強になる」、「興味がある」、「嬉しい」、後者に対しては「楽しみにしている」、「期待している」といった表現を用いて好意的反応を表明していた。

4つ目の「共感」の使用者の割合は、中国人留学生が38.2%、日本人大学生が12.3%で、中国人留学生の使用者の割合のほうが3倍近く高かった。中国人留学生、日本人大学生ともに、学会のアルバイトを断ることにに対して「残念」と表現したり、「せっかく」を用いて申し訳なさや残念さを表明したりする点では共通していた。異なっていたのは、「アルバイトをしたい」、「手伝いたい」といった表現の使用の有無で、これらの使用者の割合を見ると、中国人留学生は11.8%いたが、日本人大学生は0%だった。上述の「好意的反応」の結果もあわせて考えると、中国人留学生は「学会の手伝い」をすることを強く望んでいることを表そうとする点で、日本人大学生と違いが見られる。

以上〈対人配慮〉の機能的要素に関する中国人留学生と日本人大学生の違いをまとめると、中国人留学生は「アルバイト紹介に対する礼」や「アルバイトをしたい気持ち」を積極的に読み手に伝えることで、日本人大学生は「直前の断りであること」や「自分の都合で断ること」など自身の過失に言及することで、それぞれ〈対人配慮〉を示そうとしていると言える。

最後の〈締めくくり〉の機能的要素は「最後の挨拶」、「日付」、「署名」、「返信期待」の4つである。このうち、「最後の挨拶」、「日付」、「返信期待」については、中国人留学生と日本人大学生の間で使用者の割合に有意な差はなく、「最後の挨拶」のみ、中国人留学生の使用者の割合が1割強あったが、ほかはすべて1割を下回り、使用者の割合は非常に低かった。使用者の割合に差が見られたのは「署名」である。「署名」は中国人留学生が67.1%、日本人大学生が38.5%で、中国人留学生のほうが使用者の割合が高かった。〈きりだし〉で見た「宛名」と「冒頭の挨拶」と同じように、「署名」の使用は、正式で整ったメールという印象を読み手に与える。中国人留学生のほうがメールの形式面に気を配っていることがわかる。

## 2. 各機能的要素の複数回使用の状況

### 複数回使用者の割合と使用回数

各機能的要素の使用回数は1回のみというのが多かったが、中には、複数回使用されていた機能的要素もある。そこで、各機能的要素の複数回使用の状況について、見ていきたい。表3に結果を示す。

まず、中国人留学生と日本人大学生の各機能的要素の複数回使用者の割合を見ていく。中国人留学生については「宛名」、「冒頭の挨拶」、「話題提示」、「現在の行為」、「言い訳」、「意向表明」、「直接依頼」、「謝罪」、「好意的反応」、「共感」、「関係維持」、「代案提示」、「最後の挨拶」の13の機能的要素において、日本人大学生については「冒頭の挨拶」、「話題提示」、「言い訳」、「意向表明」、「無理・責任承認」、「前置き」、「関係維持」の7つの機能的要素において、複数回使用者が見られた。

複数回使用者の割合の高かった機能的要素は、中国人留学生では「言い訳」が30.3%、「冒頭の挨拶」が23.7%、「謝罪」が13.2%で、上位3位は1割を超えていたが、日本人大学生については最も使用者の割合の高かった「無理・責任承認」においても9.2%であった。

表3 各機能的要素の複数回使用者の人数と割合

| コミュニケーション機能 | 機能的要素    | 中国人留学生<br>76人 |       | 日本人大学生<br>65人 |      |
|-------------|----------|---------------|-------|---------------|------|
| きりだし        | 宛名       | 2人            | 2.6%  | 0人            | 0.0% |
|             | 冒頭の挨拶*** | 18人           | 23.7% | 1人            | 1.5% |
|             | 自己紹介     | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 話題提示     | 6人            | 7.9%  | 3人            | 4.6% |
| 状況説明        | 現在の行為    | 1人            | 1.3%  | 0人            | 0.0% |
|             | 言い訳***   | 23人           | 30.3% | 3人            | 4.6% |
|             | 意向表明     | 4人            | 5.3%  | 6人            | 9.2% |
| 確認          | 状況確認     | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
| 理解の促し       | 直接依頼     | 1人            | 1.3%  | 0人            | 0.0% |
|             | 間接依頼     | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 伺い       | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
| 対人配慮        | 無理・責任承認* | 0人            | 0.0%  | 4人            | 6.2% |
|             | 謝罪**     | 10人           | 13.2% | 0人            | 0.0% |
|             | 前置き      | 0人            | 0.0%  | 2人            | 3.1% |
|             | 謝礼       | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 好意的反応    | 3人            | 3.9%  | 0人            | 0.0% |
|             | 共感*      | 7人            | 9.2%  | 0人            | 0.0% |
|             | 気配り      | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 関係維持     | 3人            | 3.9%  | 1人            | 1.5% |
|             | 代案提示*    | 6人            | 7.9%  | 0人            | 0.0% |
| 締めくくり       | 最後の挨拶    | 4人            | 5.3%  | 0人            | 0.0% |
|             | 日付       | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 署名       | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
|             | 返信期待     | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |
| その他         | その他      | 0人            | 0.0%  | 0人            | 0.0% |

Fisherの正確確率検定 \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \* p<.05



複数回使用における回数に注目すると、中国人留学生については2回の使用が主であったが、[冒頭の挨拶]で3回使用が3人、4回使用が1人、[話題提示]で3回使用が1人、[言い訳]で3回使用と4回使用が各3人、[代案提示]で3回使用が2人、5回使用が1人いた。日本人大学生についてはすべて2回の使用で、3回以上の使用はなかった。

このように、複数回使用に関わる機能的要素の数、使用者の割合の高さ、および使用回数、いずれの面からみても、中国人留学生のほうが日本人大学生に比べて機能的要素の複数回使用を多く行っていることがわかる。

#### 機能的要素の複数回使用に関する中国人留学生と日本人大学生との相違

次に、中国人留学生と日本人大学生の間で、複数回使用者の割合に差が認められた機能的要素を見ていく。

各機能的要素の複数回使用者の割合について、Fisher の正確確率検定を行った結果、[冒頭の挨拶]、[言い訳]、[無理・責任承認]、[謝罪]、[共感]、[代案提示] の6つの機能的要素において、中国人留学生と日本人大学生の間に有意な差が確認された。

[冒頭の挨拶] の複数回使用者の割合は、中国人留学生が23.7%、日本人大学生が1.5%で、中国人留学生のほうがかなり高かった。(5)(6)(7)は中国人留学生の書いたメールの冒頭部分である。「お忙しいところすみません」、「いつもお世話になっております」といった表現は日本人大学生も用いていたが、(5)のように両者を同時に用いた例は日本人大学生のメールには見られなかった。また、「お元気にお過ごしでしょうか」といった近況伺いの表現や「だんだん寒くなっております」といった時候の挨拶を用いた日本人大学生はいなかった。

##### (5) 本田先生へ

先生 こんにちは お忙しいところをお邪魔して、ほんとうにすみません。いつもお世話になってありがとうございます。

##### (6) 拝啓

本田先生

ご無沙汰しております。先生は相変わらずお元気にお過ごしでしょうか。

##### (7) 本田先生

こんにちは！このごろ、紅葉もきれいになりましたね。  
ご機嫌はよろしゅうございますか。天気はだんだん寒くなっておりますので、お体に気をつけてください。

[言い訳] の複数回使用者の割合は、中国人留学生が30.3%、日本人大学生が4.6%で、中国人留学生のほうがかなり高かった。藤森(1995)では、対話場面を想定した断りについての分析を行い、日本語母語話者と比べた中国人日本語学習者の特徴として「[弁明]の多用現象といえるような、理由を重ねて述べるストラテジーが使用されている」(p.84)ことが報告されているが、メールでの断りにおいても同様の傾向が得られた。中国人留学生の書いたメールを見てみると、(8)(9)のように、「来日する友人が日本語ができない」ことや「友人が日本に来る理由」など、友人についての詳細な情報を述べている学生が多く見られた。一方、日本人大学生については、友人ではなくホストファミリーが来日するという設定であるが、ホストファミリーの詳細について述べている学生はいなかった。

(8) 突然、あの日、友達が中国から日本に来るという予定が入って、(略)。

友達が日本語が話せないですから、空港まで迎えに行かないと、すごく心配ですので、

(9) 昨日一番親しい国の友人から来週に日本に来て、付き添ってほしいという連絡がありました。彼女は五年間も付き合っていた彼氏と別れて、気晴らすため日本を旅行したいと言いました。丁度来週は中国のゴールデウイークですから、彼女は来週来ると決めて、飛行機のチケットさえ買ってしまいました。彼女は日本語が全く話せないし、失恋したばかりだし、私は彼女のお願いをなかなか断りにくくて、承知してしまいました。

[無理・責任承認] の複数回使用者の割合は、中国人留学生が0%、日本人大学生が6.2%で、日本人大学生のほうが高かった。日本人大学生の書いたメールを見てみると、(10)(11)のように(下線部が[無理・責任承認])、[無理・責任承認]のうちの1つは「直前の断りであること」、もう1つは「自分の都合で断ること」か「相手に迷惑をかけること」で、この2つを述べることによって複数回使用となっていた。

(10) 学会が一週間後に迫った今になってからお断りするの  
は大変申し訳ないのですが、(略)。

私事でご迷惑をおかけして申し訳ありません。

(11) 真に勝手ながらアルバイトは出来なくなってしまいました。  
急な話となつてしまい、大変申し訳ありません。

〔謝罪〕の複数回使用者の割合は、中国人留学生が13.2%、日本人大学生が0%で、中国人留学生のほうが高かった。本稿で〔前置き〕に分類した「申し訳ありませんが」や「すみませんが」を含めて計算した場合は、中国人留学生が23.7%、日本人大学生が6.2%となり、日本人大学生においても中国人留学生と比べると数として少ないが、複数回使用が認められる。

(12) は中国人留学生の書いたメールの例である(下線部が〔謝罪〕)。1つ目の謝罪表現「本当に申し訳ございません」については、日本語母語話者が書く場合は「本当に申し訳ございませんが」のように〔前置き〕の形を用いることが一般的であると思われるが、中国人留学生の書いたメールでは、(12)のように〔言い訳〕あるいは〔意向表明〕の直前に出現する場合でも〔前置き〕の形を用いていない例も見られた。

(12) この間先生に頼まれたその学会のアルバイトのことなんですが、本当に申し訳ございません。 ちょうどその日に友人が国から来日なので、空港にで迎えに行かなければなりません。(略)

もっと早めに先生に教えたほうがいいのですが、本当にすみませんでした。

〔共感〕の複数回使用者の割合は、中国人留学生が9.2%、日本人大学生が0%で、中国人留学生のほうが高かった。中国人留学生の書いたメールを見ると、(13)(14)のように(下線部が〔共感〕)、〔共感〕の1つは「手伝いができなくて残念な気持ち」、もう1つは「学会の手伝いをしたいこと」や「相手の厚意や期待に応えたいこと」に言及するものが多かった。前述したように、日本人大学生のメールでは「学会の手伝いやアルバイトをしたい」という表現自体が使用されておらず、このことが〔共感〕の複数回使用者がいなかったことにもつながっているのだろう。

(13) 今回学会の開催されて、本当に喜んで学会の手伝いを  
したいのですが、あいにく一週間後うちの国の友人が来日する  
つもりです。残念ながら手伝うことができませんので、  
本当にすみませんでした。

(14) あいにくですが、来週国からの友人が日本に旅行しま  
すので、大変残念ですが、先生から、貴重なチャンスをい  
ただいたのに、せっかくの学会に手伝うことができないの  
は本当にもうしわけがございません。

〔代案提示〕の複数回使用者の割合は、中国人留学生が7.9%、日本人大学生が0%で、中国人留学生のほうが高かった。中国人留学生の〔代案提示〕では、特定の人物を紹介するといった内容が多く、(16)(17)のようにその人物についての詳細な情報を述べたり、(15)のように1文で表せる内容を2文に分けて述べたりすることによって、複数回使用となっていた。一方、日本人大学生は、「現在代理を探しておりますので、見つかり次第先生にご連絡差し上げたいと思います」や「その代わりと言ってはなんですが、学会のお手伝いをしたいという友人が数人いましたので、後日紹介します」のように、特定の人物名は挙げずに、1文で〔代案提示〕を行っていた。

(15) しかし、王さんを頼みました

私を代わりに王さんが行ったらよろしいですか？

(16) そのかわり、私の友達のAさんに来週の学会に手伝いに行ってもらおうかという提案があります。

Aさんは経済学部3年生で、とても真面目で頼もしい女の子です。

それで宜しければご連絡ください。

(17) もし先生は別のアルバイトをほしたら、同じ研究室の李さんを薦めます。李さんも日本に三年来ました。日本語テスト一級を合格しました。専門も上手です。もし先生は李さん採用しようたら、私に連絡します。

中国人留学生と日本人大学生の間で、複数回使用者の割合に差が認められた6つの機能的要素のうち、〔冒頭の挨拶〕、〔無理・責任承認〕、〔共感〕は、機能的要素の使用者の割合においても差が見られたもので、〔冒頭の挨拶〕と〔共感〕は中国人留学生、〔無理・責任承認〕は日本人大学生のほうが使用者の割合が高かったが、複数回使用においても同様の結果となった。つまり、中国人留学生のほうが〔冒

頭の挨拶」の使用が頻繁に見られことに加えて、長く丁寧に書く傾向があると言える。そして、〈対人配慮〉では、中国人留学生は「共感」、日本人大学生は「無理・責任承認」の使用が多いだけでなく、これにかかわる内容を詳しく述べようとする傾向があることがわかる。

また、「言い訳」、「謝罪」、「代案提示」は、使用者の割合においては中国人留学生と日本人大学生の間に差が見られなかった機能的要素であるが、複数回使用者の割合はいずれも中国人留学生のほうが高いという差が見られた。この要因として、中国人留学生のほうが「謝罪」を繰り返し述べようとする事、**「言い訳」と「代案提示」においてより詳しい情報を加えて説明しようとする事**、そして、複文の形で1文にまとめて示せる内容を、複数の単文を用いて示していることが挙げられる。

## VI まとめと今後の課題

以上、各機能的要素の使用者の割合、使用回数の観点から、中国人留学生と日本人大学生の断りのメールを分析した。分析結果のまとめと、メールの書き方を指導する際の留意点について述べる。

第1に、日本人大学生のほうが「宛名」、「冒頭の挨拶」、「署名」の使用が少なく、メールの形式面への配慮があまりされていなかった。日本人大学生は、親しい人と携帯メールでのやりとりに非常に慣れている分、その影響を受けやすいとも言える。改まったメールを書くときの形式、携帯メールとの違いについても指導項目に入れるべきだと思われる。

第2に、中国人留学生のほうが「冒頭の挨拶」を頻繁に用い、挨拶を長く書く傾向が見られた。挨拶を書いたほうが丁寧さが増すが、長い挨拶は時として冗長な印象を読み手に与える場合もあり、注意しなければならない。指導の際は、メールの件名や読み手との関係に応じて、挨拶をどの程度書くのが適当かを示す必要があるだろう。

第3に、中国人留学生のほうが日本人大学生と比べて、「意向表明」の使用が少なかった。会話においては日本語では直接的な断り表現を避ける傾向があることが先行研究で指摘されている<sup>7)</sup>。日本語教育の現場でもこれに配慮した指導がなされ、このことを意識している日本語学習者は多いと推測される。しかし、メールの場合は、「意向表明」をした

ほうが読み手に断りの意向を明確に伝えることができ<sup>8)</sup>、また、書き言葉として「…ので、申し訳ありません。」よりも「…ので、できなくなりました。申し訳ありません。」としたほうがより改まった形となる。「意向表明」の使用は、メールと会話における断りの違いとして、留学生への指導上、特に留意すべき点だと思われる。

第4に、中国人留学生の書くメールでは、「言い訳」と「代案提示」は複数文で「友人に関する情報」等を詳しく述べようとするものが多かった。情報が少な過ぎるのも良くないが、詳細な情報を示すことが必ずしも読み手に良い印象を与えるとは限らない。藤森(1995)では、日本語の断りの発話について、「弁明」の多用現象を中国人学習者の特徴として挙げ、「これは押しつけがましいという印象を母語話者に持たせる恐れがあるとして気をつけなければならない」(p.88)という見解が述べられている。言い訳や代案提示をどのように書くのが効果的かということも、指導項目として取り上げるべきだろう。

これ以外に、日本人大学生が「無理・責任承認」をよく用いる<sup>9)</sup>のに対して、中国人留学生は「謝礼」、「好意的反応」、「共感」を用いて読み手への配慮を示そうとする傾向にあることや、中国人留学生のほうが「謝罪」の繰り返しが多いことがわかったが、これらをメールの書き方の指導においてどう扱うかは今後の検討課題としたい。断りのメールを書くときに「無理・責任承認」、「謝礼」、「好意的反応」、「共感」、「謝罪」を加えることは、丁寧さを増すことにつながるが、どのような表現で、どの程度使用するのが適当か、これらの判断は、メールの読み手となる日本人教員の評価を基に検討する必要があるからである。新たに日本人教員を対象とした調査を行い、明らかにしたいと考えている。

また、中国人留学生のほうが日本人大学生よりも「冒頭の挨拶」、「言い訳」、「代案提示」を長く詳しく書いたり、「謝罪」を繰り返し書いたりする傾向があることがわかったが、指導方法を検討するためには、その原因が何かを探る必要もある。これについては、現在、中国人留学生に対するインタビュー調査結果をもとに、分析を進めているところである。

## 引用文献

生駒知子・志村明彦(1993): 英語から日本語への  
プラグマティック・トランスファー: 「断り」と

## 注

- いう発話行為について. 日本語教育, 79, 41-52
- 宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち (2008): 「生活場面で必要となる日本語書きことば」データの収集と分析. 日本語教育学世界大会2008 予稿集 2, 267-270
- 熊谷智子・篠崎晃一 (2006): 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差. 言語行動における「配慮」の諸相, 国立国語研究所, 19-54
- 藤森弘子 (1994): 日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー「断り」行為の場合. 名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集, 1, 1-19
- 藤森弘子 (1995): 日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—. 日本語教育, 87, 79-90
- 水本篤 (n.d.): Stats Stuff, Kappa coefficients (カッパ係数). <http://www.mizumot.com/stats/kappa.htm> (最終アクセス2013年3月26日)
- 築晶子・大木理恵・小松由佳 (2005): ジェンダーの視点から見た断りのEメール. 日本語とジェンダー, 5, 94-106
- 吉田さち (2009): 韓国人日本語学習者のメール文における断り—日本語母語話者との比較を通じて—. 国立国語研究所報告, 129, 259-280
- 吉田さち・野原ゆかり・森篤嗣・宇佐美洋 (2010): 「生活場面で必要となる日本語書きことば」データに対するコミュニケーション機能の付与—4種類の交渉場面に関する文章を対象として—. 社会言語科学会第26回大会発表論文集, 186-189
- Beebe, Leslie M., Takahashi, Tomoko, & Uliss - Welts, Robin (1990): *Pragmatic transfer in ESL refusals*. Scarcella, Robin C., & Andersen, Elaine S. & Krashen, Stephen D. (Eds.), *Developing communicative competence in a second language*, New York: Newbury House Publishers, 55-73
- Howitt, Dennis, & Cramer, Duncan (2003): *An introduction to statistics in psychology*. Rev. 2nd edition. Harlow, England: Pearson Education Limited.
- Kumagai, Tomoko (1993): *Remedial Interactions as Face-Management: The Case of Japanese and Americans*. 湯本昭南・桜井雅人・馬場彰 (編) 松田徳一郎教授還暦記念論文集. 研究社, 278-300

- 1) 調査は, 外国人留学生を対象に行ったが, 調査校はいずれも中国人留学生の在籍者数が最も多く, 収集したデータの約5割が中国人留学生のデータだった。留学生に限らず, 日本に在住する外国人の中で中国出身者の占める割合は高く, 中国人学習者の傾向を知ることが, 教材開発の上でも重要である。そこで, まず中国人留学生のデータから分析を始めることにした。
- 2) 意味公式は, 「発話行為を分析する際の単位」(藤森, 1994: 5) とされている。
- 3) 熊谷・篠崎 (2006) は, 依頼場面における発話データを「相手に対する働きかけの機能を担う最小部分と考える単位に分割」(p.22) し, その単位を「機能的要素」とし, 「個々の機能的要素を, 依頼の言語行動においてどのような役割を担っているかという観点からグループにまとめたもの」(p.22) を「コミュニケーション機能」としている。
- 4) 学部の正規生として1年次に在籍している外国人学生。独立行政法人日本学生支援機構が実施する日本留学試験を受験した上で, 各大学が実施する私費外国人留学生入学試験を経て, 入学するケースが多い。
- 5) Cohen の  $\kappa$  係数は, 2人で行った分類の一致度を示す。 $\kappa$  の値が1に近いほど評定者の分類は一致していることを表す (Howitt & Cramer, 2003)。本研究では, 3人の評定者の一致を見るため, 評定者を2人ずつ組み合わせで, 水本 (n.d.) の計算方法により,  $\kappa$  係数を計算した。
- 6) 例えば「また機会がありましたらよろしく願います。」を「関係維持」とするか, 「直接依頼」とするかのように, どの部分に注目するかによって, 3人の判定が異なる場合があった。また, 中国人留学生のメールについては, 日本語の語彙・文法上の誤用があり, 学生が書くとした内容がはっきりしないために, 3人の判定が異なる場合もあった。
- 7) 生駒・志村 (1993) では, 日本語母語話者と英語母語話者を対象に行った談話完成テストの分析結果から, 「日本人は中途終了文を使うことにより直接的な断りを避け, 地位が上の人に失礼にならないように気を付けているのだが, 学習者はそうしない傾向にあり, それだけに地位が



上の人から失礼だと思われる可能性がある」  
(p.47)と示されている。

- 8) 築・大木・小松(2005)では、日本語母語話者による断りのEメールを分析した結果として「会話と違いEメールの場合は〈断り〉を明記することが多い」(p.98)ことが報告されている。
- 9) Kumagai(1993)では、日米のドラマ・映画のシナリオに見られる謝罪のやりとりを比較し、全体に、責任表明は日本人に、説明はアメリカ人に多く見られるという傾向が報告されている。

#### 付記

本稿は、ICJLE 2011 日本語教育世界大会(2011年8月21日)の口頭発表「断りのEメールの分析ー日本人大学生と中国人留学生の比較ー」に基づく。

(2013年4月30日受付)

(2013年7月10日受理)